



日本史⑮ (貴族政治の展開)

4月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2024年4月21日(日)

藤原北家の藤原良房は858年11月7日宣旨にて摂政となり、884年6月には攝政太政大臣藤原基経に、政務を関白させるとされた(日本三代実録)。

これは平安初期の50年間に続く、平安中期(850-1050)の摂関政治のはじめであり、平安時代藤原氏の嫡流が摂政・関白を独占し、天皇に代わって、あるいは天皇を補佐して政治を行なった。そして以後200年の政治形態となった。

摂政関白太政大臣藤原兼家の五男に生まれた道長は、順調に官位はたどったが、自身それほど栄華を極めるとは考えていなかった。ところが、兄の関白道隆、道兼が相次いで疫病で倒れ、姉の女太后詮子の推輓によって幸運にも政権の座についた。

宇田源氏の倫子を正妻に迎え、名門藤原公任、源俊賢、藤原行成などの協力を得て政権を強固にしていった。

政治家としては、特に優れた政策は持たなかったが、国内の政情は安穏であり、ことなきを得た。

1016年藤原道長が摂政となった時、太政大臣、左大臣、右大臣、大納言、参議等公卿の数は、藤原氏18、源氏4、他氏1であった。

道長の長女彰子が一条天皇の中宮、次女妍子が三条天皇の中宮、三女威子が後一条天皇の皇后となり、一家から3人の后が立つとは前例のないことである。

このとき道長は「この世をば我が世とぞ思う望月の欠けたることのなしと思えば」と詠んだ。

道長は、文学の面では優れた詩人であり歌人であった。

彼が作った漢詩は、「本朝麗藻」に多数収められ、和歌は、「ご拾遺集」以下の勅撰集に取られている。

「紫式部日記」によると、彼は「源氏物語」に非常に関心を抱き、その面でも紫式部を後援していた。道長は、政務に忙殺されてはいたが、23年に渡って毎日日記をつけ、現存する自筆本は十四巻に及び、「御堂関白日記」として、11世紀初頭の政治や世相を移す貴重な資料である。

参考：(金谷俊一郎著 決定版日本史 学研プラス刊、日本通史 復旦大学出版社)